

こそだて通信

2014年3月号

== 夢を持って ==

先日の雪がまだ日陰に残ってはいるものの、日に日にあたたかくなってきましたね。ご近所のお庭から梅がかわいらしく顔をのぞかせています。

先日冬季オリンピックが終わりましたが、2020年の東京オリンピックの開催が決まって、体操クラブに入会する子どもたちが急増したという話を聞きました。子どもたちにも夢を持ってほしい、という親心からでしょうか。

子どもが将来なりたい職業の調査によると、幼稚園時代、男の子はスポーツ選手、女の子は保育園の先生などの身近な人の職業を上げる子が多いそうです。

一方、親が子どもに就いてほしい職業は男の子では公務員、女の子では薬剤師がトップだそうです。夢は持ってほしいけど、現実的には手に職を持ち安定した職業に就いてほしい、というのが親の本音のようです。それはお子さんの将来を案じてのものでしょうから、その気持ちはよくわかります。

けれど、夢を持てるのは今を生き生きと生きている証ですから、現実はともあれ、お子さんが生きる毎日の中に夢があるようにと願っています。

かといって、そのために親が殊更に頑張ることはないように思います。

まず、夢を語ったときに「そんなのなれるわけじゃないの」「向いてないんだから無理よ」とつぶさないこと。「こっちの方がいいんじゃないの」と親の考えを押し付けないこと。子どもが自分を信じて夢を語れるように、子どものいいところを伝えていくこと。それくらいでしょうか。

冬季五輪史上日本人最年少でメダルを獲得した平野選手は、競技が終わって真っ先にしたい事を聞かれると「おうちに帰って、おうちのご飯が食べたい」と言いました。子どもらしい発言と世間は言いますが、「おうち」というのが、そのままの自分を受け入れてくれているからこそその発言でしょう。

子どもにとって、そんな「おうち」でありたいと願いつつ、家族みんなで春に向かって進んでほしいと思います。

(臨床心理士 藤井あづさ)